

---

# 明治幕府の崩壊

津田 真澄<sup>\*</sup>

## 第一章 ラナルド・マクドナルドの登場

### 第一節 外国人の登場

1867（万延元）年1月に米国通商条約締結を記念して日本側正使がアメリカを遠洋航海でアメリカ大統領を訪問して締結することが決定し、咸臨丸を勝海舟艦長が指揮して万次郎が主通訳として渡航するという事件がおきたことをすでにのべた。この翌年に井伊直弼大老を江戸城桜田門外で水戸藩浪士団に殺害されて井伊大獄が終わるのだが、それは井伊直弼殺害の直前だった。

勝海舟は初めてのアメリカ訪問なので、いわゆる高位高官の訪問見物はやめて、ひたすら万次郎をつれてカリフォルニア周辺の港、工場、建物の徒歩見学に徹して、その見聞記が印刷された。

アメリカは日本からは遠かった。だが万次郎は1827（文政10）年土佐藩中の浜生まれで1841（天保12）年5月9日に377トンのアメリカ捕鯨船にたすけられたのだから、知らぬのは日本人だけで、日本のまわりの雨は外国船ばかりだったといわねばならない。実際、すでにのべたアメリカ行きの船でもジョゼフ・ヒコという漁師あがりの通訳も同乗していた。

外国船には日本列島周辺に入ると鯨、鮑、海鼠、にしんなどが豊漁でアメリカ、フランス、イギリス、オランダ、ロシアの漁船が増えて、北の藩では長崎と、外国人との難民問題で1830年頃からにぎやかになった。万次郎の英語の話がこのころの唯一の例外とおもわれると困るので、ここでは外国の経験がない、同時代の役人の例をあげよう。

相手としてとりあげるのは、1824（文政7）年2月3日、当時のイギリス領土（現在のアメリカ・オレゴン州）コロンビア川のフォート・ジョウジャ州生まれのイギリス人ラナルド・マクドナルドで、母をインディア族とし、レッド・リヴァーアカデミーを卒業して銀行員となり、ロンドンにわたり、カナダで日本人を知り、日本にあこがれて財を捨ててハワイに渡って船舶を志した24歳であった。

マクドナルドはハワイで捕鯨船に乗り日本島を目指し、宗谷海峡で運転を狂い、ボート・食物を得て単身で離船し、利尻島に上陸して松島藩の商人船に捕らえられた。そのころ英語を理解する人は皆無で、外国人は日本滞在は囚人逮捕なので松島藩から長崎へ護送された。マクドナルドは1848（嘉永2）年6月5日に利尻島に上陸して9月12日に長崎に着いた。

## 第二節 森山栄之助の登場

### 第一項

幕末の通詞は日本の長崎奉行所が唯一の場所で、奉行所は肥前～筑前の6藩が警護し、長崎奉行所管理の、奉行のもとで多数の役人が指揮し、多数の通詞団がほとんど世襲で永年通詞、大通詞、主席通詞、小通詞、通詞助のように初研修から順番に昇進していく階層制で、長くオランダ、中国、ポルトガル以外を不要とする言葉の国だったから、森山の時代には長官はオランダ人で、日本人もオランダ語で英語は理解も話しも読み書きもできないというのが普通だった。

ところがこの中にひとりだけ他の言葉に関心がある通詞がいて、この時代には森山栄之助がただひとりだった。

ラナルド・マクドナルドはアメリカのマキドンと呼ばれて利尻島の海で捕らえられたアメリカの大卒者だったが、一人者だったから異国の不法入者ということで松島藩から長崎に送られて寺に監禁されることになった。この担当通訳が森山栄之助になったが、他の異国人と違うのは、ラナルドが日本字に関心をもち、森山がいう言葉を日本字でかきつけようとする事だった。ラナルドはオランダ語は知らなかった。

ラナルドは小さな部屋に単独で住まわされて、字を手持ちの紙にかきつけていた。検使寄記、大通詞がそれに気がつき、日本語から英語を教わろうと森山に思わせたことからこの話が始まる。アメリカ船は長崎には来ないし、滞在期限不定ということで森山と他の通詞を集めて日英蘭辞典の収集を始めることにして20名の生徒を集めた。

マクドナルドが長崎の寺大悲庵の独牢に捕らわれて、長崎からアメリカ船ブレグロ号で脱出したのは1846（弘化3）年2月4日だが、北海道宗谷岬周辺から松前藩をへて長崎に来るまでの記述は、豊かだがあいまいである。おそらくマクドナルドの長崎滞在は約2年だろうが、その2年は日本語教育と「諸厄利亚語和解」の英日辞典10冊の編集をつづけていっただろう。マクドナルドは日本語の教師になることを念願としていた。森山を始めとして長崎の若い通詞の英語学力の向上には森山栄之助とマクドナルドがいてのことであった。

### 第二項 森山栄之助の登場

アメリカは独立後に西海岸に進出し、東側からの捕鯨船、魚介の捕獲や鯨業でイギリスを凌駕し、カリフォルニアでの石油の鉱業で動力を獲得し、綿紡績業でイギリスの高級綿布を上回る繊維品大国になった。そこで1940年代以降は世界で大進出を開始し、とくに日本を通る貿易では捕鯨漁業、輸出業の二大回路の構築が不可欠になった。中国は茶、大繊維粗綿布の重要国になった。ペルー太平洋艦隊の1850年代の日本列島への登場は当然だった。

ペルー来朝にはアメリカは非常に重要な準備をしてブレブル号、ラゴダ号などの記事をすべて収集してた。とくにマクドナルドが関係していたブレブル号は宣誓供述をとり、ラゴダ号についてはシンガポールの大きな新聞がアメリカで著名になり、ニューヨーク・ヘラルドが各社

に転載されて読者の話題になった。

オランダから出島医官として30年間在日したフィリップ・フランツ・ジョンキアー・シーボルトが1832年に書いた『日本』がこのころには熟読されていた。

先述したように、日本政府では徳川幕閣の最高顧問とされた水戸の徳川斉昭がアメリカ・スパイとして入ってきたと万次郎に強い疑いをかけて、ペリーとの外交から排除せよ、と老中首座阿部正弘に文書で申し入れたほどなので、交渉通訳を万次郎にたよることで安心した幕閣は困り果てた。江川担庵は土佐藩に万次郎の幕府家臣への転籍を依頼して準備を整えたからである。斉昭が英語を話せて議論できる人ではなかったが、それが出たので、ペリー艦長との会議は従来どおりオランダ語でやることにしよう和阿部正弘老中は考えた。だが、英語討議はペリーの要求だったから安部老中はオランダ語、英語訳ができる日本人を探すことで行き詰まってしまった。

神奈川でのペリーとの国交は2月4日開始とされていた。ところがロシア人は通商交渉の開始を12月にもとめる先鞭を見つけだして来て、英語通訳交渉者皆無の人材がさらにはやまってしまった。

### 第三項 マクドナルドと森山栄之助の進路

マクドナルドはオレゴン州でレッド・リヴァー・アカデミーを卒業してロンドンで銀行に勤め、カナダで会った日本人漁師を忘れられず捕鯨漁業で日本に渡ることを夢見、ハワイから日本海に入ることを目指して宗谷で遭難し、1847（弘化4）年9月に長崎におくられてきた24歳の若者だった。この若者が他のアメリカ、オランダ人とは異なり、日本文字に関心を持つことに最初から気づいた小通詞の森山栄之助は、通詞20名を集めてオランダ語なみの蘭和語辞典の作成を目指して1日10時間の学習を開始して、その司会をつとめ、マクドナルドが1850（嘉永3）年に退去帰国するまでつづけた。森山の英語学習は3年つづいたことになる。ラゴダ号のニューヨーク・ヘラルド紙の記事をペルーも読んで森山の英語力の習練を承知しているほどだった。とくにそのオランダ語の知識は通詞の中でも抜群であることをペリーも記憶していた。先述したロシア・プチャーチン艦隊との外交交渉での森山の英語・オランダ語による交渉は抜群で、その報告が長崎奉行所から幕閣まで届いた。

アカデミック・スクールでの日本語への関心の高いカナダ人を捕らえた通訳者の向学心を安部正弘は見事にとらえた。2月8日、ペリー艦隊が神奈川宿応接所に上陸するのを4日前に応接係の組織は変更され、森山は主席通詞から英語・オランダ語担当として仮に大通詞に昇格し、アメリカ施設応接係林大学頭、江戸町奉行井戸対馬守、目付鶴殿民長鋭などが任命された。20日に長崎で森山から英語を教えられた小通詞並の名村五八郎が加わった。アメリカ側の通訳は主席通訳官ウイリオアムズ、艦隊通訳官、ボークマン(オランダ語、英語)、羅森(中国人)であるという離れ技が出現した。

主席通詞は2月4日から6月2日までペリー艦隊との交渉、イギリス、ロシア、オランダ、ア

メリカとペリー会議後の各国会議がつづいて、万次郎のように、海運知識技術、捕鯨業と教育のような初期開発、教育、実務、英語の社会的展開の人生などの通訳は可能だった。しかも江川担庵を失った直後では、森山のような英語にすぐれて関心がある逸材が出てきた以上、万次郎は30歳代からは森山に道を譲ることになったろう。

#### 第四項 森山栄之助の道

栄之助は世襲に似た外国貿易の官吏職業で収支する運命にあったが、20歳半ばからイギリス、フランスなど伝統のオランダとは他となる異なる外国船が増えはじめて、30歳ではついにアメリカの若者を拘留して英語をじっくりと学ぶ経験をもった。そしてこの若者から学んだ英語が役立って1854年のペリーと日本との神奈川での和親条約の締結という大舞台に引き出されて、自分の職業としては夢にも見られなかった人生になり、しかも江戸という都に住んで、下住みではなく、恐れられる天下の役人に昇ることになった。

相手となる外国はどんどん増えていくし、その外国に出掛けるのも夢ではない。この運を大切に役人生活を大事にすれば、栄耀栄華まちがいなしだと思ったろう。

人が人生をどう思ったか、さまざまだろうが、万次郎と栄之助がわずかな間にぶつかったのが、この文でとりあげてきた1860（万延元）年の井伊大獄終焉なので、この年でおわらせることにしよう。

すでにのべたように、この年は1854年2月、日米和親条約が締結され、下田・函館・長崎が開港され、1860年に日米批准条約がアメリカで交換された年であり、井伊大老大獄を終了させた年だった。万次郎が咸臨丸艦長勝海舟と別れて江戸を去る年でもあった。森山栄之助は1845（安政2）年に政府登用所（蛮所調書、異国応接係）で幕府に公用され、栄之助は多吉郎と改名して長崎在住の妻子と離縁し、ペルーが中止した通商条約を実現するために来日したタウンゼント・ハリスの部下が江戸で暗殺された年だった。この年から日本は幕末に入るので、良い切り目だったと言えよう。

### 第二節 官人森山 多吉郎の結末

#### 第一項 日米友好通商条約の締結

備後・福山藩主 安部正弘（1919～57）が去り、森山多吉郎は幕府の役人として蛮所調所に大目付、目付、勝麟太郎、簗作阮など多数とともに異国応接係に勤務し、長崎から離れて妻子を離別し、嘉永が安政に代わって1866（安政4）年、総領事タウンゼント・ハリスが下田に来て定住し、下田奉行と森山とできち、ふくの召し使いをハリスとその部下の通弁官の世話にあてがい、ペリーとの条約の締結交渉を開始した。通商は経済として国法の基本であるので、森山は国方の実質に早くも入ることになり、下田、江戸城との往復が頻繁で、小石川金剛寺坂上の自宅、九段下の蛮所調所に31歳で往復し、疲労に泣いた。だが満足していた。

ペリー条約以後、鎖国政策はたちまち崩壊し、イギリス、ロシア、オランダ、フランス、の

和親条約が錯綜し、ハリス通商条約は第二段になった。ハリスは総領事の権威を要求し、老中安部正弘は佐倉藩主堀田正睦を老中外国御用取り扱いに重用して下田奉行を指示させた。1858（安政5）年以後、井伊直弼の無勅許条約承認以後、次代将軍指名、親幕、反幕の諸藩の激化が表面化し、1860（万延元）年の幕・藩・外・日の争いが頂点に近づいた。

この中で老中安部正弘が39歳で病死し、イギリス、フランスはアヘン戦争で中国に大攻勢を開始、ハリス、ヒュースケンは藩閥を強める諸大名に対抗して安政4年12月に通商条約案を提出した。森山は役人としてイギリス、フランスとの連絡がないままに多大な苦勞を重ねた。結局ハリスの勅許なしの日米通商条約調印を直弼が安政5年6月に決断し、森山は疲労に果てて、1858（安政5）年からアメリカ、ロシア、オランダ、イギリス、フランスとの友好通商条約を締結した。森山はこれにより39歳で大通詞の資格をあたえられた。得意の絶頂に立った。

1858（安政6）年7月、イギリスはラザフォード・オールコックが着任し、井伊大老の安政大獄は絶頂に達して吉田松陰も死刑に処された。1860（万延元）年12月、ハリスの部下ヒュースケンが浪士に殺された。外国係老中安藤対馬守は、1860年井伊大老の桜田門の変の後、1863（文久3）年1月、坂下門外で浪士に襲われて傷をうけたが、オールコックを自邸に招き、森山の通訳で折衝を続けた。オールコックは森山について「条約の日本語の訳文作成は森山自身だ。外国代表との文通はかれの手だった。絵や写真も彼の作だった」と讃えている（『大君の都』）。

イギリス公使オールコックは日本はアメリカに使節を派遣しているから、ヨーロッパにも派遣することを提議し、老中久世広周藩主をおどろかせた。安藤対馬守は使節派遣に森山の英語の弟子福地源一郎、翻訳官福沢諭吉を加えることにした。森山は通訳で時間がとれなかったからである。得意の絶頂がさらにつづいた。

## 第二項 井伊大獄以後

1864（元治1）年、森山は44歳になり、戸田藩士宮本家の娘の教（のり）と結婚して家事に温かく、生麦事件、下関戦争、鹿児島戦争と内乱が激しくなっていく時代がこくなった。森山は長子栄之助を得て、外国奉行通弁訳頭取に昇進し、通訳をつづけた。

幕府もフランスへの依頼、イギリスの対抗などを選ぶ役人があらわれて関係が複雑になり、将軍中心の官僚操作は器量が重要になった。森山はフランスの勘定奉行になった、小栗上野介についており、1867（慶応3）年の兵庫開港では小栗が懐刀である慶喜に従って、兵庫開港で赴任した。時は大成奉還の年で森山は兵庫奉行組頭が昇進の最後で疲れ切って50歳で気力、体力を全て失った<sup>1)</sup>。

---

1) 吉村昭『海の祭祀』昭和61年10月。詳細だが年、日付の確認が容易ではなかった。

## 第二章 万次郎の転身

万次郎は1860（万延元）年1月、アメリカ側の会社蒸気船2415トンのボーハタン号、咸臨丸2隻の通弁主務としてアメリカに向かって5月に帰港した。井伊直弼大老は3月に江戸城桜田門外で水戸浪士に刺殺されていた。井伊大獄は終わった。

1860年8月25日、万次郎はそれまでの軍艦操訓所教授を解雇された。英語通訳などの業務は終わってないのでつづいていたが12月にペルーの部下ヒュースケンが麻布で薩摩藩士に殺害されたので江川家の周辺は不穏だった。1861（文久元）年2月には、ロシア艦隊、イギリス船2隻が対馬で海岸測量するという日米神奈川条約後の不穏がつづいたので、万次郎が帰国後初めてとり組んだのは小笠原島に在住する19戸、30人の米英人36名で、小笠原島は先述のように帰属不明の地域で国籍確定のための仕事であった。江戸で麻疹が大流行して伊豆下田で士官、水夫19名が麻疹で発病する事件もあった。この流行で妻、鉄が24歳で去った。3人の男女を残して去り、万次郎は5歳の男子を医学に進ませる思いを持った。万次郎は自宅で英語、数学、航海術を教える多忙さで過ごした。

### 第一節 西洋船船長となる

外国船が増えてきたので足が不自由だった越後の大地主が長崎にゆき、海員養成のために万次郎の話を聞き、蘭学を学んで幕府に捕鯨船建設の願いを出した。その地主平野廉蔵は万次郎のもとで捕鯨機械業のための英語を学び、横浜で帆船を動かすキャッチャーボート2隻の建造を目指した。万次郎はこの船を操作し、1863（文久3）年1月、父島二見島に入港した。

万次郎は父島にいた捕鯨経験を持つ外国人6人を雇用し、経理採算を調査した上で父島沖で捕鯨し2頭の鯨を確保してすべての業務を整理した。この業務に万次郎は4ヶ月間従事し、さらに数頭の鯨を捕獲したが、一つはアメリカ人の籍が不正であることと、二つ目は機械技術・技能が不完全で、まだ容易でないことを確認した。

### 万次郎の転身

ペリー来航交渉の通訳に水戸斉昭が万次郎反対で文句をつけて、ペリー提督が英語通訳の主張を事前に要求しているのに、従来までのオランダ語使用を主張したために困った安部正弘は、長崎奉行所小通詞森山悦之助をみつけて、これを大通詞として昇格させることで難をのがれたことは述べたが、万次郎は土佐に帰国してからふってわいたような事件で最初の挫折にあった。しかもペリー来航に重なるロシア開港交渉のブーチャチン事件で恩師江川担庵の急死にであったのだから、通訳に、もちいられなくなり役人になった今後の人生をかんがえる状況に立たされた。

帰国後、軍艦操練所教授の職を失い、通訳の職は続いたものの、自分がアメリカで幼児から体を張って学んだ海洋学、海軍技術をどう生かしていくべきかということが、森山とは異なる自分そのものの技能だということしかなかったろう。その中で文久年間の万次郎に現れた捕鯨

技術、捕鯨艦へのこの業務こそ万次郎が愛をもって生き甲斐につとめられる業だったのではなかったか。1862（文久2）年で万次郎は35歳だった。

1862（文久2）年は井伊直弼の井伊大獄の終末の2年後で列島内では言えば大事件の年で、五か国との通商条約締結で江戸徳川時代の鎖国条約は完全に打ち破られ、国内では政権が家定から家茂、仁孝から孝明へと転換して幕末時代が出現し始めた年であった。こまかな事件だけでも將軍家茂・和宮の婚儀、京都での島津久光の寺田屋騒動、横浜での島津久光の生麦騒動、長州藩士の品川御殿山のイギリス公使館の焼き討ちなど騒然とした状況がはじまっていた。安部正弘も徳川斉和も死に、ペリー事件は終わっていたが、鹿児島藩にとっては軍艦をめぐる島津斉彰が久光の時代になった薩摩藩の時代は、万次郎にとっては自分に意味があると思えた。

この話は薩摩藩家老小松帯刀から幕府に中浜万次郎を3ヵ年、蒸気船運用その他を開成館教授に迎えたいと願い出ることから始まった。万次郎は島津斉彰の敬称認可の年に最初に会って尊敬をしたし、江川担庵の弟子になってからは何度も接触し、英語の門人の立花鼎之進、従僕とともに家老に京都で会った。小松は国の家老大久保一蔵（利通）と協議し、大阪の土佐藩屋敷で山口容堂の甥と会い、転籍を受けることにした。

## 第二節 万次郎の安定

1866（1865年）正月、万次郎は38歳、鹿児島に到着し、鹿児島・開成所で航海、測量、造船、英語の教授を担当することになった。翌年の1月、土佐中浜の母を見るために休暇を貰い、立花鼎之進、与忽次を連れて慶応2年に中之浜に帰った。

鹿児島に着く前に、万次郎は、おそらく小松から請われたのだろう、高知の土佐藩主に会い、弟子の立花鼎之進を英語教授に斡旋し、四国宇和島藩主伊達宗城藩主に会い、長崎に到着した。5か国条約が成立して以来、長崎は外国商館が並び、歓楽街が立ち並ぶようになり、日本の名藩の出張施設が立ち並び、船舶の往来が激しくなった。海の藩のように山奥の藩から引き受けて輸送する業務を始める土佐藩のように長崎に県の商社を建てて、海外から船舶を購入することを始めて武器、軍船の購入に英語ができる藩内人を使用するケースが多く、鹿児島藩の伊知地壮之丞、土佐藩の池道之助の文章が多く出ており、万次郎の雇用も重大な意義をもっていたということがわかる。

この外国からの購入業務は短日、短時間で終わることはなく、家老小松帯刀がじかに以来して上海や外国商社、外国汽船内で取引することもあり、江戸の日本会社内でも、その種の商業はめずらしくなく、万次郎は江戸に戻ると、日本内での商売は荒れたなど慶応年代（1865年以後）に入って慨嘆するようになった。

日本列島の1860年代以降は内外火器、重砲器であふれる戦争時代をもたらした。万次郎は其中で過ごしたことになり、その時代が森山に比べてよかったどうかわからない。万次郎は鉄が死んでから藩医の妹を後妻にして2人の男子をむかえて後に離別し、さらに江戸にもどってから後妻を得ていた。

万次郎は、その前は別として、ともかく鹿児島に到着して開成所に入り、長州で失った乗組員の至急補充養成に入ったことは明らかであろう。というのは長州脱藩の坂本龍馬が勝海舟、西郷隆盛と1864（元治1）年の会談の中で薩摩藩・長州藩の動向、今後の見通しを決めた歴史上最高が分かったあとの、坂本龍馬の最初の薩摩藩訪問が行われた話が司馬遼太郎『龍馬がゆく 第六卷（文春文庫）』に書かれている。この書では龍馬の鹿児島開成所の見学は内部から工場にまで及んでおり、龍馬の宿所は家老小松帯刀宅であるので、万次郎がこの時に鹿児島に滞在すれば会う機会がなかった筈がない。ここでの遼太郎の記述は長いし、万次郎のことはアメリカ帰国の時から龍馬は画家川田小宙の絵書を通じて知っていたし、勝海舟がおこなった江戸の海軍操練所では勝の案内で万次郎と懇意にすでになっていたのだから、この龍馬の見学記にまったく記載されていないことは信じにくい。思うに、万次郎が機械技術にくわしく、英語堪能で長崎での軍備を知るがゆえに家老小松帯刀が教員採用に熱心だったとしても、万次郎に見学のさい、龍馬がぜひ会いたいとはおもわなかった人物だったと見ざるをえない。万次郎4代目の子孫である中浜博氏の最近の著作「私のジョン・万次郎」によれば、万次郎年表に記載はあるが、鹿児島時代についての記述は欠落している。

万次郎は鹿児島ではここで語るべきことはなく、1866（慶応2）年に退職して無警察状態の江戸にもどったらしいという以外にない。

明治時代（1866年）になって、有力土佐藩主山内容堂は、明治元年10月に土佐藩に再雇用し、深川の土佐藩下屋敷をあたえられ、山内容堂は1872（明治5）年まで存命した。

明治政権は1867（明治2）年に成立し、新政府は山内容堂に対して家来中浜万次郎に徴子をもうしつけると命じた。徴子とは新政府に各藩から召しだされる有識者のことでこれに応じた万次郎は開成学校の教授に任命された。開成学校とは森山悦之助がペリー条約交渉の時につくられた蛮書調査書のことで、これが1855（安政2）年に開成学校と呼ぶ洋学問所を生みだし、新政府でその後に東京帝国大学になった。このころ万次郎はまた離別して、しげと結婚し、電信が始まり、鉄道建設計画が出来、新教育制度ができ、外国工場が生まれるという、西洋化時代に移り始めた。万次郎は1867年に40歳になっていた。1870（明治3）年に中博士となり、万次郎の弟子の立花鼎之進（高知）は教授試補として採用された。万次郎が東京で会食の後に残る食べ物を詰めて両国橋の途中で飢えに苦しむ江戸の人々に寄与した話は、万次郎がアメリカ時代に教えを拝した新約聖書の『良いサマリア人』の話をずっと実践していたことを示すこととして知られた。

万次郎が知られたのは1870（明治3）年7月、政府がドイツ（プロシア）とフランスの間に深刻な戦争が始まったことを国民に認識させるために藩識者を派遣する大集団の通訳として万次郎が同行することであった。この同行は万次郎の行動で知られた『良いサマリア人』の話を示すものとされていた。

この集団は8月28日にアメリカに出発し、9月2日にドイツ・フランスにわたり、明治4年（1874）年に帰国するという旅行で大山巖（薩摩）、池田弥一（肥前）、長州（品川弥二郎）、



林有造（土佐）を含んでいた。万次郎にとっては、ニューヨークに大陸横断鉄道で西側から経験し、ニューヨークでは着いた日から休日を利用してフェアヘブンの50年ぶりの再訪問を果たすという最後の願いを込めた旅行になった。

この旅行は無事に出発し、万次郎は20歳以来、繰り返していたフェアヘブンの人たちとの涙ながらの再開を実現できたけれども、フェアヘブンからニューヨークに帰ったときから寒気のリューマチが再発し、1871（明治4）年3月、ヨーロッパゆきを断念して帰国した。万次郎44歳。

万次郎は東京で治療に励んだが脳溢血も加わり、すべてを退職して療養に専念した。万次郎は銀座の京橋、土佐の中浜に住み、家族と暮らした。万次郎の家族とホイットフィールド夫妻の家族とは現在に至るまで行き来しており、中浜博『私のジョン・万次郎、子孫我明かす漂流の真実』（小学館 1994年10月）は、その意味ですばらしい著作である。

万次郎については、30後半からの鹿児島生活時代は、日本が戦火の時代に入っていたために、国内についての叙述が貧弱なので、例えば森本悦之助の人生と対比する工夫をせざるをえなかった。そして人生についての結論が出ているわけではない。人はどう生きるべきだろうかという課題が大切だということは分かっているが、この様な比較で直接に対比することは困難だった。森本悦之助の生活の方が華やかに描かれるようになったからであろうか。

（1999年9月22日受理）